廓の差笑　上

へ13
2942
1

# 兩個女兒叙

趙氏連城璧の由来天下に傳ふる處

詩選に曰口切文句通子寰瓊君、書符

世界悦によく鄙の窕の扉閨あるまゝべ

淫去の先王部さまが德紙好むものろを

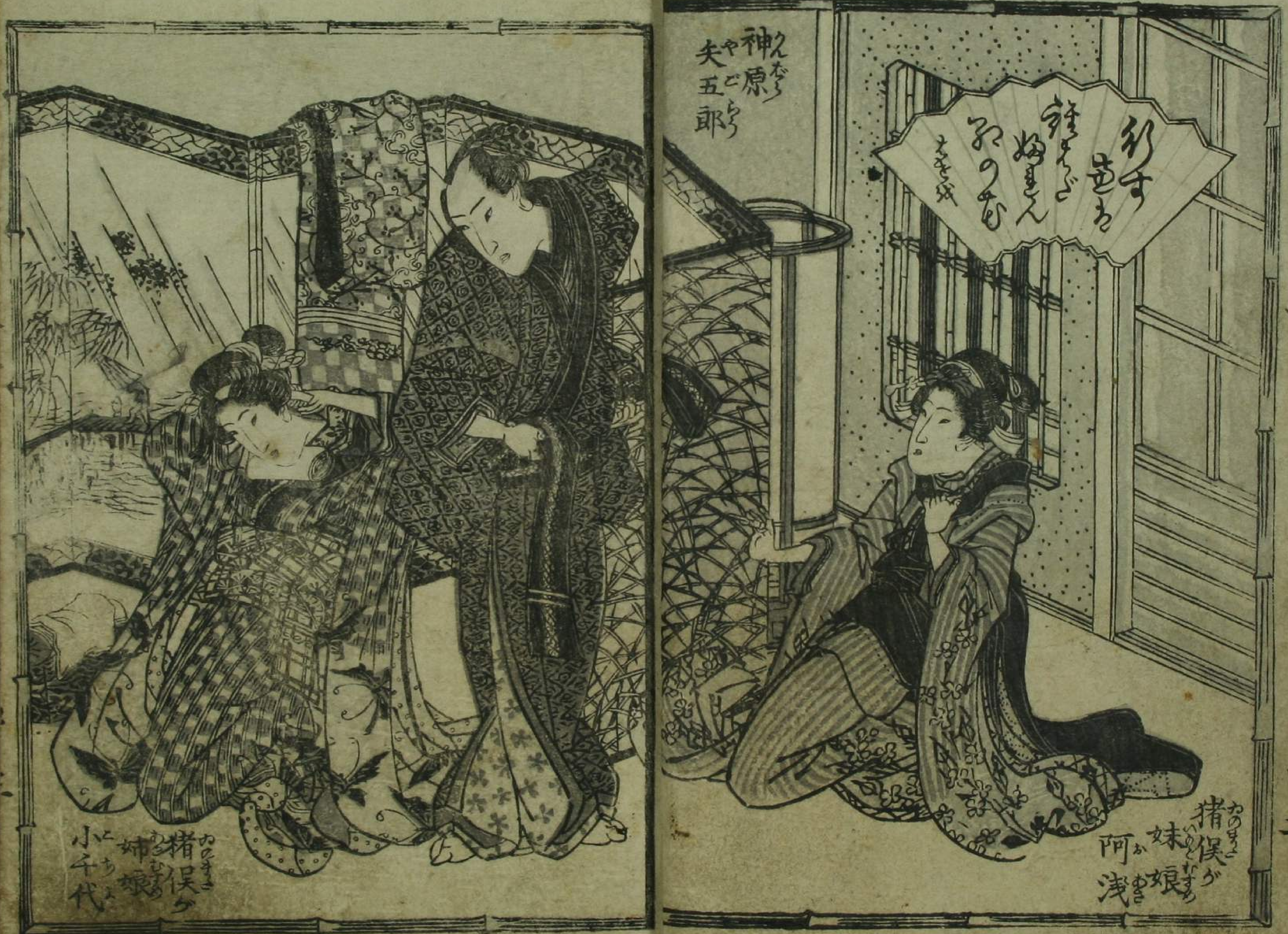
好むがぎやく行ふあたらしてんずるゐ[illegible]

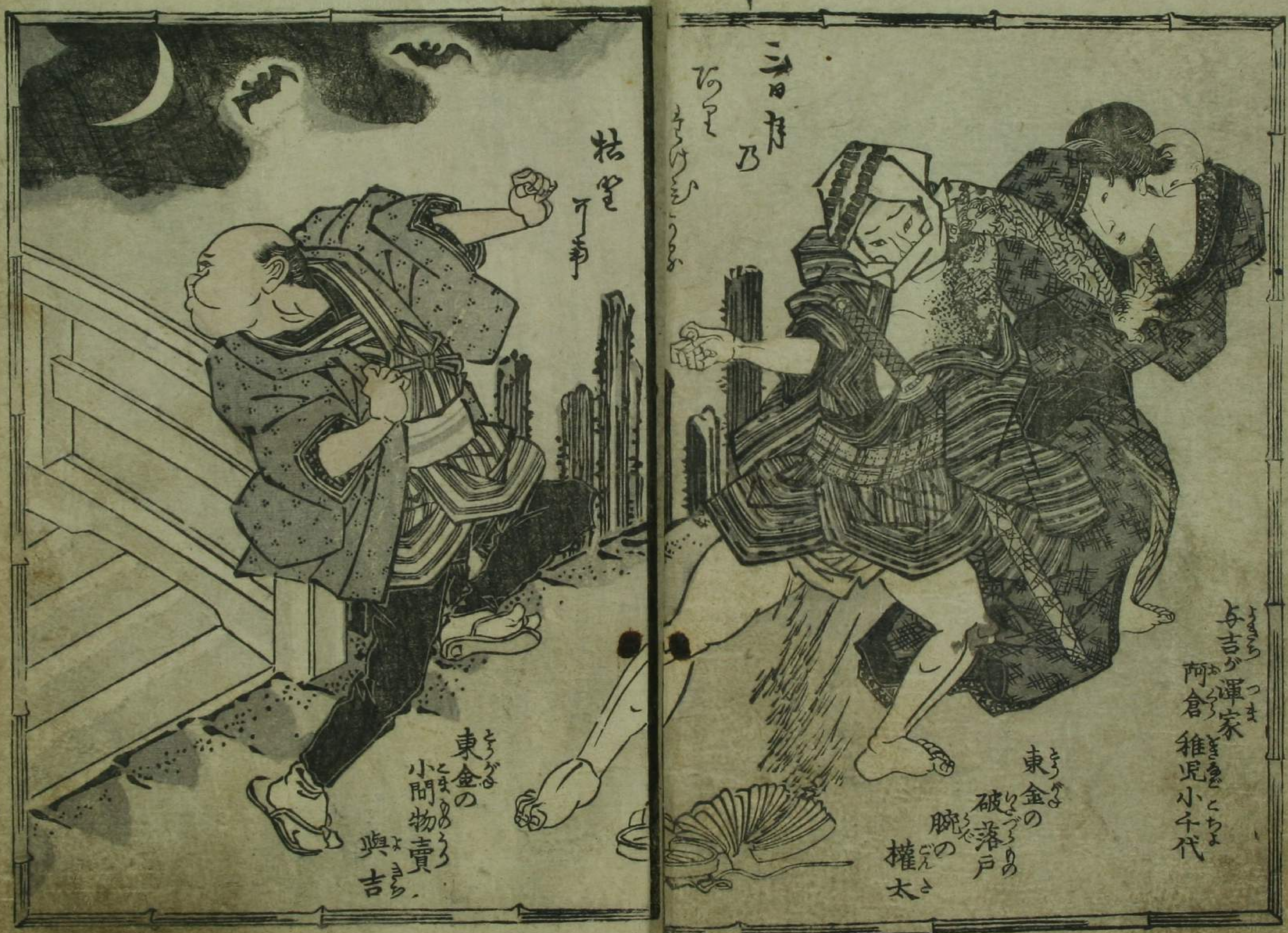
へ13
2942
1-12
特
昭和九 七 九

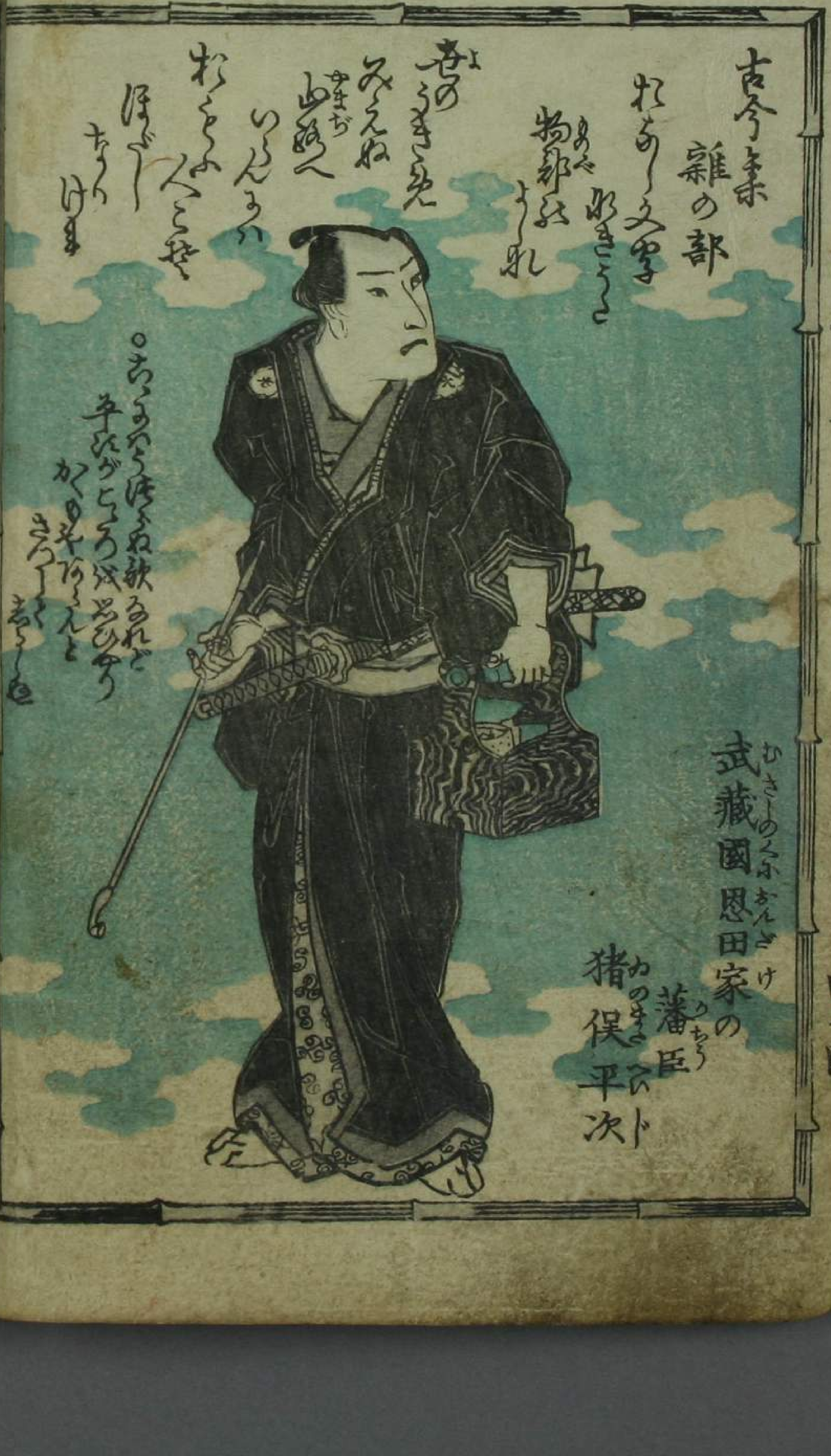
こゝに息子なる者どもを守する御野暮と
いひ穿さぐる所を通といへど甚だ寝言を
足元へも寄せぬ通家の気嫌とし
らく人情をもつて勝負ハ儒仏の道にまさる
通人のさ弁ハ極細の物理ぞんじ止めて
聞て手むかいハ通で不通ても打すへて勧懲

の意ある事をうしなふやい理くつを
文字もつて則茲に序すものつふ

松亭主人戯題


神原（かんばら）夫五郎（やごろう）
引す出れ
錦ぞ
始まん
和のむ
よき成
猪俣（いのまた）が妹娘（いもとむすめ）阿浅（おあさ）
猪俣（いのまた）が姉娘（あねむすめ）小千代（こちよ）


三日月乃ひかりもまけじこうもりか
枯堂可笋
与吉（よきち）が渾家（つま）阿倉（おくら）
稚児（をさご）小千代（こちよ）
東金（とうがね）の破落戸（ごろつき）腕（うで）の權太（ごんた）
東金（とうがね）の小間物賣（こまものうり）與吉（よきち）


古今集 雑の部
おなし文字なきうた
物部よしな
世のうきめ
みえぬ山路へ
いらんには
おもふ人こそ
ほだし
なり
けれ
○ちゝのみは浅からぬ歌なれど
年ひさしくもの思ひの
かくのみやなりぬると
きこゆしく
志るし
武蔵國恩田家の
藩臣
猪俣平次

# 両個女兒郭花笠初編巻之上

江戸 松亭金水編次

## 第一回 奸婦の毒殺

世に行るゝ繪入讀本。年々歳々梓に鏤むもの幾百千といふをしらず。おの／＼新奇の趣向を採りて。これに加ふるに実録を以てし。ます／＼因縁因果の物語に本づきて。千變萬量の巧を競ひ。既に種蘊の底を排ひて。世の人々に膾炙する。稗説いふとも事舊にたれど。

輪回応報の理を推ときハまこと恐らくある物語。なき
にしもあらざるべし。されバ上総の国東金といふ処に。小間
物を商ひつゝ世を営む。与吉といへるものありけり。妻ハ
お金とよび做して。眉面容も人にすぐれたるに。捷れてよかれど
心ざまハ。慳貪邪智の生れなれバ。与吉ハことさを拙く
に。疎むといへど夫婦が中に女児をまうけて。その名を
小千代と号けつ。今年四歳になりけれバ。今まの
妻ハ去るとをハ稚きものゝ不便さと。おもひかへして
折にふれ。律につけて吳兄めりつ。まさに河里めりつ年
月を今日とくらし明日とおもふ。お金ハ此年二十
三才。与吉ハ三十の上を越え。元来篤実律義なれバ。
性質なれバ純めける。お金が我儘さるに堪ぞ。
あくまで程よき男もあるべきと。思ひにつけて夫婦の中
も。たゞ稚児の恩愛に。引るゝ心あるのみにて。互に実
情もあらざりしに。綺情かゝる事ありとり振舞の
東金ハ。上総の国中一なる繁花にて。商人ハ軒を

なれバ。賣買交易に便よければ。諸国の人の入集ひ會そ。ゆゑにぎハしき所なれバ。芝居物真似あるしの定席。浄瑠璃写し絵の寄場もありて。人々多くは群集なすなり。或日お衾ハ。稚児の。小千代を抱きて其処此処と所も定めずあそびあるくよ。酒屋の主人をよびつけまして。奥の方よりオイくと呼ぶ声きこえり小笑あれバ。河原なるくふりむくにあちら辺の破れ戸まで。銃に不動の像を彫。その彩色の見ゆるとて。銃の

檀太と異名さる。男にてありけるが。おころハ宅に夫とうち笑ひ「よんだきげんでござんすね。お羨しいトいひすてゝ往んとするを檀吉ハ其処を発して。おころが袖を引へて 檀「コレサ何もそんなにふきげんなくして往ずとハねへわな。おころちやも今さらくよ上河らぶ。たつた一人できさくしくつてあるゝねへ所。ちよつど見かけたらく呼んだのだア。マアちよつとよつて。これさお衾さん。ふたるへたるせねへくちヨ ころ「ハイありがたう。夫でもちんと小山ののが

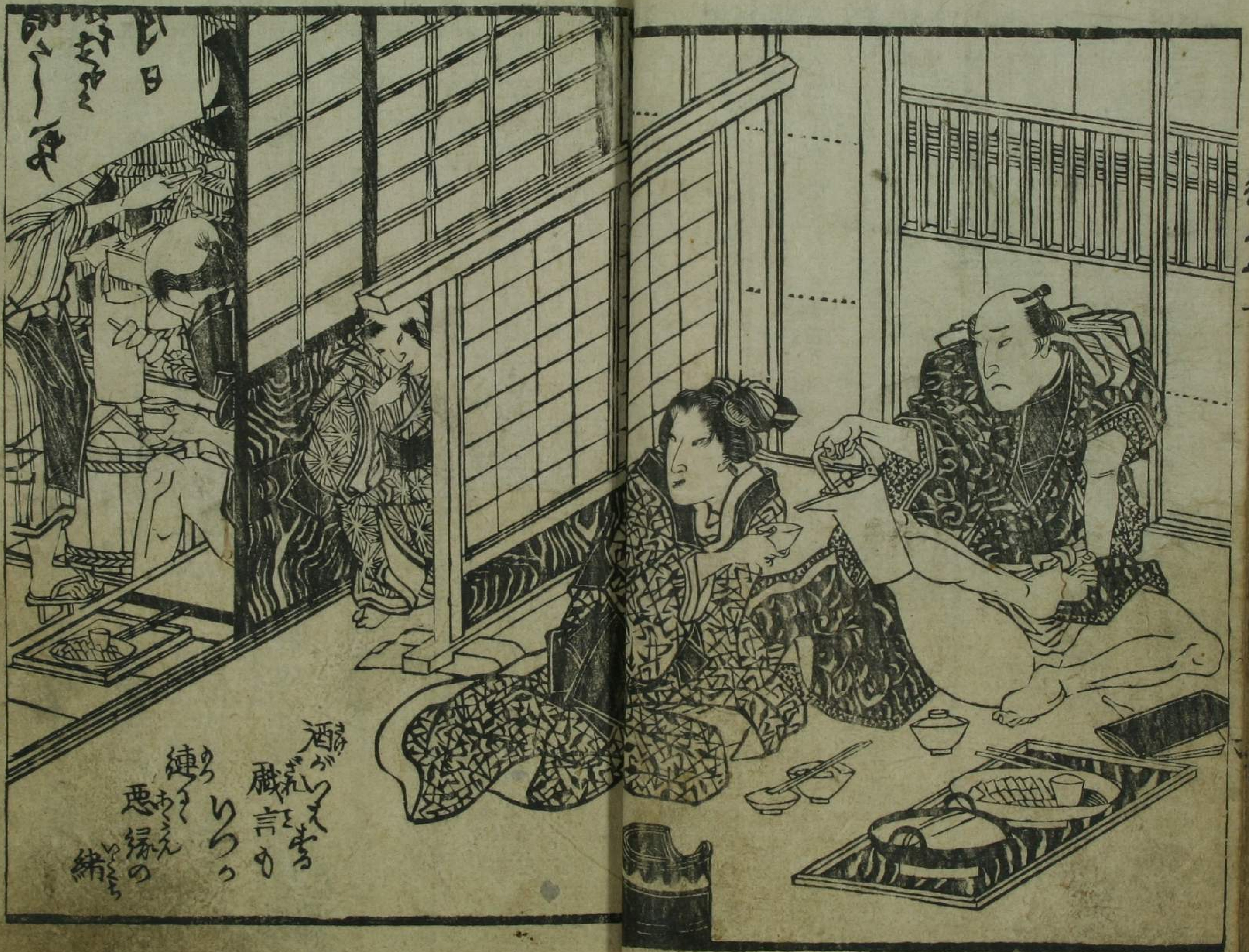
懐にありまするわな。父さんどうよいつまりませぬ　権「邪アあのも能くあんど。与吉さんと二人で大骨折で拵まへさのだらう。何のいゝわな下無理無体に引あげて盃取させべかうらへ元より好む所。何のかのとて四ツ五ツ。飲はあさぐひ気も浮く。吉さん浮きにのされ権吉も先刻より七八分の。醉心気よ興を催ふし。世間咄しのあげくにまつ語りつくして今へせや。問わずがたりのおくらが身の上人「ヨヲきやア。モウ〳〵あんな野暮な事ぞいつまゝ男哉へなぜ良人に持さと。今さら悔しくてくなりませんハテ。どうならまゝと思ふけれど。ホンニくされ縁と申ござうで。あんな娘が出来さへんざまさる継母の手にかけるも可愛さうなりとおもつて。実の子そこでおつかり添て居ますヨ　権「イヤうそ〳〵。にへまるけど調法なものぞウ。おめへは何でも与吉さんに。惚てくぬと切て居るといふるぞ。夫ざうろ金ぞでもあんな中のいゝ夫婦へ。来合へおろう上総七

郡(ぐん)のうちにやアあるめへといふ評判(ひやうばん)だ　くろ「アサ檀(だん)さんよしてもおくれっ。気障(きざ)なねへ。こちとらやア此児(このこ)を連(つれ)て理窟(りくつ)があるらう。今(いま)でも擇(えら)やアしねへ。何処(どこ)でも河岸(かし)を換(かへ)る気(き)ござれど。誰(だれ)も對手(あいて)になつてくれてがないよね　檀「おまへどやアこりいうろう　くろ「よすぎて勿体(もつたい)ないよ。まさおまへのやうな。素気(みき)でいやミのない男(をとこ)を。良人(ていし)にもつと女(をんな)は。一生(いつせう)の仕あはせだが。志つしまと気(き)があるだらうから。二(ふた)ツいくるかへないねへ　檀「インニヤおれもいろく

放蕩(だうらく)めして今(いま)めつく止(やま)ねへが。今に嫁てでも持(も)てが。まつらうと辛抱(しんばう)するきだよ　くろ「そんな放蕩(だうらく)な人(ひと)がしまると。そりやア堅(かた)くるしいやぶるな人(ひと)より。余(よつ)ぽどいゝよをぞねへ。檀(だん)さんなんぞも。是(これ)から締(しま)りなさりやア言分(いひぶん)へないのサ　檀「その法(はう)ありで何(なに)とぞうぞト辞(ことば)さくまぎさまに綱縷(しまぐれ)かくれば。お金(かね)も見より水性(うわき)の。檀太(だんた)へ年(とし)も二十六七の与吉(よきち)にくらべてハ。まてまりつねより形(なり)よ。心(こゝろ)と纏めく酒(さう)きげん。ツイ転寝(まろびね)の睦(むつ)ごとも。

かゝるまいぞの誓言に。その日は別れて帰りけり。嗚呼あの嫖婦ゆゑなれば。児までなしたる良人をおきて。仇し心を他夫に通はせ。人面獣心の身のおこなひ。後にいかなる叓をうくるとも。招先ぐに解くべし。かくてその後も折を伺ひ。しのび會るゝなどしくるれば。支に深くゆく末々の先の先まで言ひかはし。その中漆と膠のごとく。いかにもして与吉が手を放れ。権左とふうふにならんものと。日夜に心を苦しめけれども。よきちがもとより律ぎなりの。

みて。朝は疾より起出て。専ら商ひに身を委ね。おくらいに持なるまゝなればとて。飯さへ己が手自なし。内和のるすにも心をつけ。何一ツとして不足らしう。いふべきやうのあらざれバ。お糸は今さら幸として。或日良人が留守を幸ひ。権左をいはうち招きて。例のごとく戯れあそび出て権太に向ひていひけるは「不図したことでおまへが馴染。ふうなるつゝも他生の縁。どふぞ内のとんちきを与吉がのてきるで。おまへと両個胡おん中よくくらし



酔（ゑひ）がつくる戯言（ざれこと）もいつゝ縺（もつれ）てあくえ悪縁の緒（いとぐち）

こいと。なふかなりで果しれねつうぞ。いつそのことに何処へすつぱりと。逃てしまふのハおまへハ否かトいひかけられて点頭

権太「おまへせへその了簡なら。三度の物を四度喰ても おらアどうでもよる積りだヨ

今「アヽ我儘だやアないよ おまへハ何だか陰気だからきがめいるヨ。真のことだアね

権「わたしも真よ夫だがの。世界暮らしく無るもおんまり ち元がねへである女を盗むひろみやアどうみせ命からき ざしめの。いつそのくされ縁しまいトお気がくふちやをあて。俚諺がおくらハ点頭「どくをくつて皿までとやら そのまゝそこもよかろう。夫ぢやアおめへどく女くと。生業 屋どやア売めへぜ

権「さう〱そのまゝおや仕法がある。おめへの ものがらハ居りやア。直にあれが持てくるハ

今「女でこそあきそんなこともよ。びくしまるのとハ違ひますぞ。わよ でも明日でもましでへ。そのまゝとらへせらアあきそんこそぶ

権「そんなら後に持てこやう。覚られちやアいわねへぜ

今「ゑまよせそのめア安じなさんなト額をあへせてすこしの密談

母ゞて権太(ごんさ)ハうちでう。暫(しばら)くあつて茶(ちや)を調(とゝの)へ持(もち)来りて
お金(かね)みつきさせたが。おつらい是(これ)をうけ元て。今(いま)ハ良人(おつと)がかく
まてべてまそくんせく冥土(めいど)へ旅立(たびだち)。おとへ権左(ごんざ)を引(ひき)
こんで。ちんゝ鴨(かも)の鋤焼(すきやき)も。火鉢(ひばち)へ二人(ふたり)さしむかひ。夜昼(よるひる)
とろく楽(たのし)まんと。ぴと不敵(ふてき)にも目論(もくろく)で。ひつまもあらぬ
酒(さけ)きろゑ。飯(めし)や汁(しる)まで温(あたゝ)め。揃(そろ)へ置(おい)てそのゐつを今(いま)か
くとまつぞぐゑんや没(いりあひ)の夕(ゆふ)まぐれ。こうみせおつそ
すくとうる与吉(よきち)が門(かど)の口(くち)。ろりをあろせべお金(かね)うけ

坐(ざ)し「ヲヽ今(つき)おかへりか。今日ハだいぶ遅(おそ)かつたねへ。さぞお
まへひもじからう。ちやうど飯(まんま)も焚(たい)てある。酒(さけ)もすこし冷(ひへ)
ておいたヨ　与「イヤアそりやア馳走(ごちそう)だ。しかし今日(けふ)ハちつと頭(づ)
痛(つう)がして。酒(さけ)も何(なに)もきらつた。気(き)がわるく　「夫(それ)でも拵(せう)く
買(かつ)ておくれふ。そんなら飯(まゝ)をおまへがあがりな　与「飯(めし)もねつから
喰(くひ)たくねへが「大方(おほかた)風(かぜ)でも引(ひい)たのであらうが。病(やまひ)ハ食(しよく)
物(もの)とりようがあるから。我慢(がまん)しておあがりト。傍(みやう)よ膳(ぜん)を拵(こし)
らへて与吉(よきち)が前(まへ)へ持出し。頻(しき)りに食(く)ふ事(こと)を勧(すゝ)むるぞ。

例にないはお余がきりなが今日はどふしたる事やと。与吉ハそろ床やにも経しあどかゝる事とハ弥なるね身に成べくもあらざるとも。小児代を膝に抱とりて「そんなら一揃食へ見せろ。ドレ坊にも飯やらふト笑ながらお余ハ還しく「不工く坊ハ先刻からひもくるを手にをとまで。お猫がぷんとふくれて居るから。モウくよのふまきハまし ト おのれが膝へ抱きとる。それでも与吉ハ気がつかぬ。汁かけ飯を二杯あまり。食もせぬ小狗のやうに。猶尾のあたり痛くて来て、尻でも噛と傍へ倚ながらおくらハ立より「どふしたのさ」垣根が悪いさト背中をさするに。与吉ハますく苦しみつよく縁にも飛摑乱して。揚と去り来る。苦しき余ん方もなく。らく咽喉とうち叫びて。左へ傾きかへり伏して手足振り足を亀め。口より泡を吹出して。悶えくるしみもがくにつれ。お余ハ止まに仕様しつと。驚くとも食むものならず。故妻とおどろきさわぎて。介抱とれバ与吉ハ其子起。おくらが襟首をむんずと把「やおのれハよくも。よ

わやくと騙されてゞ。やくちおしい凡夫ハ此ごろ人の噂を笑へば
商ひに出て留守のとき。彼の権左を呼こんで。あるひ
ゆうべく戯しをする。どふで隠るゝもでハないと。近所
の人の蔭言をよめや子までも生して申。どんなるものも
ありやせまいと。昨夜志さのハ此方の親方ウヌ権太めと
いひ合し。今日の夜食に毒をいれ食しておちそひ
るいで苦しがつて。日頃ゝして知らぬ。てまへが拵も不千
代よめぐかへつてあかりで勅無しさのふ。新く純よるまひ

ちるら。それ此まゝ死ねまでも。庄屋どのへ手まへをひき
ずり。一言いふてかゝりねバならぬ。サア一番に縄かけ下割ま
あかる引立くも。忽地あたりを見渡したが。撞と倒
れて苦しむ最期。あゝ是果敢なき蜻蛉の。夕をまつね
命の際。なるひ亡るとかつらハ寒除へ其この人ハなんの
ひと。苦しまぎれに咎もないつれ不行の根をダあ
るへ。ナニ顔に毒をいれて。エ。モウ雑言ふもそんなこを
どふぞ言てかくれでないる。無くしれ耳にするよト

落つきなさつて跂りかひ出て ふるの代を脊中に拈し

「マア仰山な医者さまを。呼で来てなんのお騒ぎ。毒を

食らる食るなひらかな医者が来ましたは。まつゑんのつま

らねへト仰ぐ胸々にのうち。私諸く裏にまり出かける

おかたを「コリヤ待なれ。医者も何も呼ぶはおよばぬ。彦

一郎は庄屋ぢやヘト紀弥武になさるとも。渾名はさるね

魚屋の為のさうち出る物おなる。四隣近所の人々も。

何ろみなんど集会なる。おからハ年寄なる星をさるま。紀

も穏かなるなきおは。此人々が是み面を合さんへちまちまち

なの身に祟あるんと。かのくは猶豫なさく。足をはや

めて近いでうり

## 第二回　稚児の患苦

かくて人々より集会。なの体を見てうら驚き。お金ハ

何処へと。程にの辺りをうろたど探もあし。先何ぶもせよ

医師をまる此盛もなく療治が肝要。稚児の医師を

よべ。稚児ハ湯を沸せよと。家内の騒動大かたなるうぞ

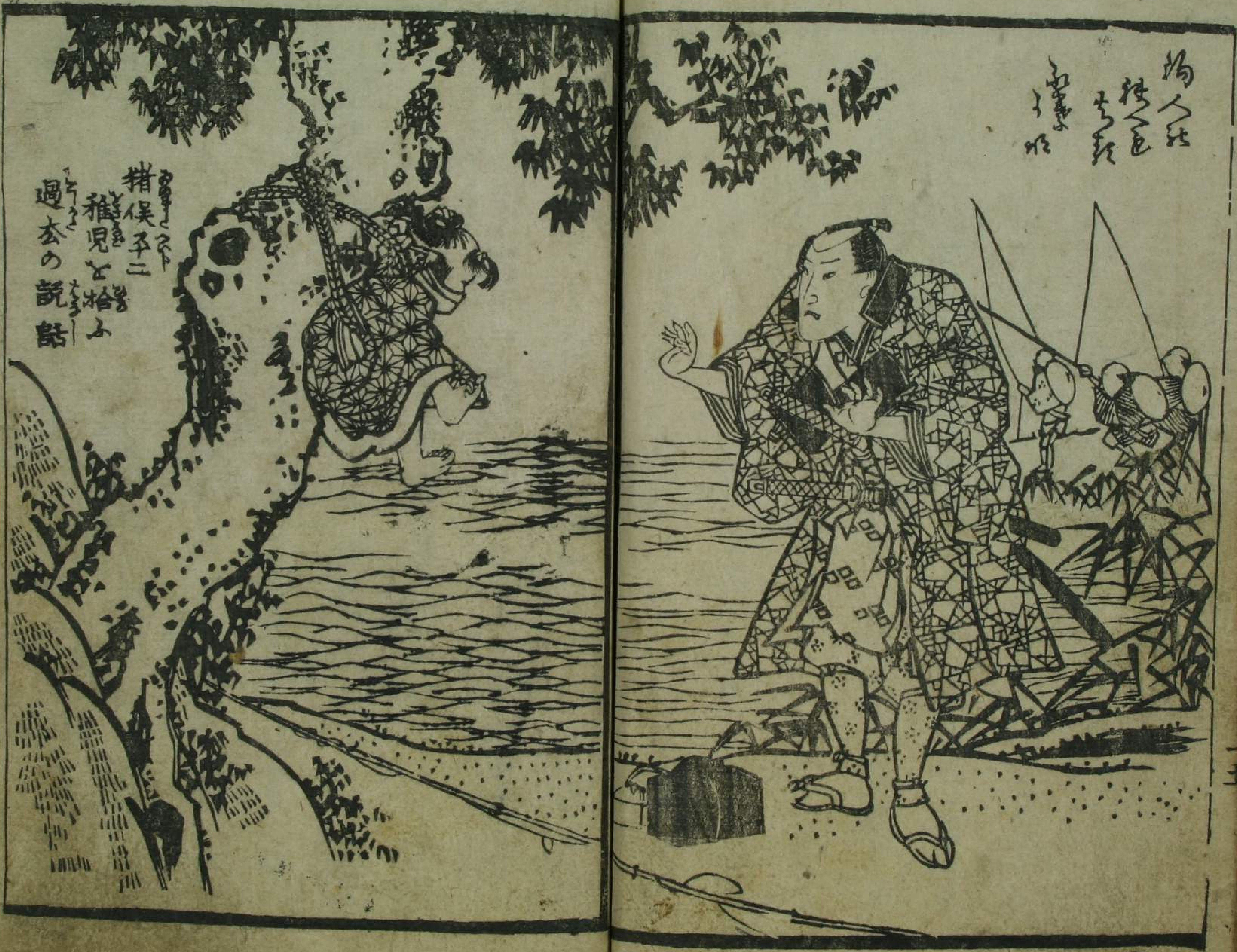
兎角するうち医師も来り。与吉が容躰見おどろく。さてハなんぞく邪和によあらん。是する不鶴毒を飲でゐる。あとおかくなりまづその毒を解すべき薬。これをよく用ひられよと。人々ふきし亦世話んで良を見合せての縁ぎらふ奸仏の。女房がもちゐたる一ツの不測ありやアてつきりなア。ぞ。と云ふ間と目であいせるへ。甚左とおくらが悪計あらんといはねばならぬの当言を苦しき中でも聞とる与吉〔モシ〕みなさま皆のて下さりし今お医君が毒を食て

とおつしやりますにちがひなく。彼の甚左とおくらめが。おろかしき容子ハ私も。薄々気を留て居る処。たしかな彼奴等が悪巧。今までおくして居ましたが。お手人方がござるさへん。迹ましても一ツの証拠。よふぞ連りのお情よ。甚左と二人を引とらへて。庄屋どのへつれて下さりませ。わしハそれでも助かりませねと。覚悟きはめてゐるわいな。トいひかけてのさおまはる。人々も承知して。とく是が甚左めとかくさんの申徃きさきを探して縛まへ易へるの。毒を解すべき薬ヲアく。

ちと銭を手に飲さんと気グよりよりてハあるまいかねゑト茶煎じてあたへれバ。久吉ハ戴き二三杯。終まで呑つけて呑バどうやら疵の痛み。少しハ和らぎ起直りつゝともなく二人の奴等銭どふぞ探しそくと。持むふようて人ぐも。そんなら所々へ手分して。二人が往方を探さんと。挑灯てらして立出る。おりから窓に障り居る。ところを良人ハ暁りまして若しき事に足まバ。身の一大事とかけてより。裾へおきたるおこの金と女児を抱て括して。逸足出して甚三をたづね委しくとその趣をかたれバ甚三も倶に驚き。今ハ盗賊の思按に及バず。身を隠すより外はなしと。跡より奴等をおろつさの宅へ入たる破落戸あらバからうと見えよハなしよく手前にまぬてとてをさあふて。行方を宛と定めねど。江戸ハ繁花と聞からに。彼処へ出ゆく急もかくも。身の落つきを計らんと。夜をこめて路をいそぎ。その次の日の夕方に。鎌倉へ着て来りつ。そもや追手の氣づかひなしと安心して良らく

二人とも労れを休めて居たりしが捻左ハ小千代をつくづく見て捻「コウおいらよく覚ねへが女ハ何と思ふか知らねへが。あの小児ハ今吉が胤。今こそ何にも知らねへけれど。大きくなつて此ごろの始末を聞とも悲かろうヤレ欺ぐらのあんのかのといふる世人のめが始まらうぜ人欺の末ハ損をとつて築ぶ銭もうけせざかりとそうしやアあるけれど。ナアこの小児を一ト思ひに塩漬あるぶんどんぶりと中川て住ちやア森ぎあがりつ。おめへハどふだといひかけられて

不濡にあらくハ血筋をうけし。児の可愛さ不挨拶も。頓にハ出来ず思案の体。捻太ハ見て頬ふくらし十二「ヤアなる無理無体に是非なう。おぢやアねへが。ぞろぞろ述べても此小児めおらア気障でならねへ。今かう見ておめへのいふなり。おまへ身ならバ命でも。やらうと言ぶんぶんとかなるかなる。もし小児の一ろ死だろう。畔の蛙を踏でころすより。モウちつとふて猫の子けい。そりやとも否なら此方もてア。一ツ了簡しておくれやアなるめへ十二「了簡して手がふまるのぐえぐおてまでもなしと連て


為人に
謀て
[illegible]
[illegible]
猪俣平二稚児を拾ふ
過去の説話

来て。捐せらるゝよふなら〽かうといけるやうぞ移りもするのさ。おまへと二人の中がこのまゝ。骨が舎利になるまでも捨る気ハござらねへが。逆りのなかに気障なるを二人ながらぽつと友白髪までぞ。たのもしくて人が驚ぞうらア〽そんならおまへとのふ手代をぽつて殺して住まへのへ桂〽己ア何もそんなな眼めしまふな良をとして。お主を白眼めるなんざアねへぞうして見えアノやア与吉の乱の。小児を太事にするらかやア。おもへ一足きらへ人一足まで。後がきまらねへの。此方も生れる土地

所を駈落するのもあんのこつた。惣まで女と夫婦になつてくらふぞ一生添とげてくと。思ふおもつまで立流るな身も。世間をせまくまさのぐらへト煙草を輪にふくぶつちやう面あつらいおれと添てくさね。るぎきらず捐てあろうものかうと我人が今さら衰しきの。一度ぐろく泣仰せべ。捨あへいよく後見ろく〽私ておめりろくもねへ仲を泣のぐつそんなるよ小児がかえらへ今。今から路へ傾んなせへおらくおくまで女子をおろこれも義ぐさと是やア後も見ねへ与吉の生死も志れねへ

ろうつからア天地(てんち)へはけ入らまとわく。そんなら此処(こゝ)から帰ろうべ
ぜアトいふんとする独引(そゞひき)とあて嬶(かゝ)ア者人も短気(たんき)な人(ひと)ぞ。
何(なま)もこうつがどふお川でも。此(こ)の児(こ)を捐(すて)るが主(ぬし)といふ。てえけ
おやアるいが孫(まご)から出(で)た児(こ)ぞと吾(わし)べかうもへそうぞ。ツイ
洞(ほら)がたぞえまるかるみ。て不あへの身(み)世人投出(なげだ)しで。おまへ不配(そ)がよ
ことよ後(くるわ)。ぎんのとの児(こ)を邸(と)よあのかとといふあので わへ捨(すて)え
きん。何(なに)をも恐(おそ)るるい四歳児(よつご)を殺(ころ)させといふ中あんまりさ。
新(に)しもわへ母なる此処等(こゝら)の乞(こつ)ち人。捐(すて)て置(おい)てもいゝじやアるいな。

そう云さるなら べきようにして。人(ひと)に拾(ひろ)われ命(いのち)たすかり。助(すけ)手
らるまんのでおるまい。たとへ此(この)大(おゝ)きく帰(かへ)さうとて親(おや)が連(つれ)から
云うるけりやア。何(なに)も捸(うま)くいるまいおやアるいからいふに捨(すて)なさ
も点所(ともしつ)で。そんなまうそうと四辺(あたり)を見(み)えませへ。小笹(こざさ)の茂(しげ)る
藪(やぶ)のかげ。隠(お)してあくの由可笑(かろし)そうで其処等(そこら)をひょろつく
歩行(あるき)まわりで。溝川(こぞがは)へでもおちてへ不便(ふびん)と。榎(えのき)の朽目(うろ)を
幸(さいわ)ひと。ふと子代(てちよ)を其処(そこ)へおしいれて。ありあふ縄(なは)にくゝるく
捨(すて)し「今(いま)かくきんへお役(せうべん)なさそ。だれぞ来(く)るうち待(まつ)てあれト

孫ぢがねの藥草二ッを求めにやらせ。サア是でよく。粉にも猫にも喰はしれぬ下拵。さておくらが手をとりて見たや不ちそ立きりけ是よりその夜は弥徒の。母がうちに参り明る日の。昼比ハ江戸ち人若き者おしの喜助をたづねつ。太刀鼻丁といふ所に。小家をかりてちつみ住。おくらがねずみ商ひし。跡へのある限りは日毎に酒のみのみしてぞ多く月日を送りける。却説与吉は人々謀持ちて跡を追せけれど。時刻も遥にのびられば。与吉がおくらが行方ハ知れぞ。悔しがるも詮方なくて。只管医者に療治を待く。一日二日過ぎるほどに。与吉が運や強かりけん。漸に後の毒を解して。命ハつゆに助りしかど。その毒眼中に止まりて目の痛むこと甚しく。かくてハあるまじと様々に。心をつくし名薬をもとめて用ひれども元来死すべき大毒薬。その眼病ハ命のかはりにて療治ハしがたきなりしに。これを治さんにハ巳の年月日時揃ふて生れし女子の生血をもて洗ぎかけねば忽ち

平愈(へいゆ)までと思へど手なかりて。なりゆく病ゆくべくまこと。医者(いしや)もおのく許りけり。目の事ハいかとなる時ふ。いか
そ死んだる憐るゝなん。余淺ハうらめしと。云ひなりこゝろを
苦しめても。まこと如何とも詮方(せんかた)なく。猶重なる月の経る
終(つひ)に両眼(りやうがん)盲(めしひ)けるべ。それより又痛みさり。心地(こゝち)を
なほ常にかへりて孫ど擣り果てハ身の片輪(かたわ)。さりや活業(なりはひ)を
なりかたく。四辺(あたり)の人も日ごろの正直(せうぢき)ども此(この)のる憐の
余命を。悲しむ人も多けれども。朝な夕なの世話(せわ)もしつ

永年(えいねん)あまりハありけれど。頼(たの)みて果(はて)べきよるなかりければ。
この上は身の上をかくて。針按摩(はりあんま)をならひ
つ。身上(しんしやう)をかさつけて。僅(わづか)の金(かね)を貯(たくは)へるしむかしも
往(ゆ)るれし。今(いま)を立ち出て江戸(えど)へ行きしの所ありて。
針按摩(はりあんま)の盲人(めくら)などを世にある役得(やくえき)よりて更に日ある
を江戸(えど)へ出けれど。親(した)しき人もなき身なれバ。其(その)ころ
箕輪(みのわ)の小田原(をだはら)町にて。これハ弟子(でし)ども多くありて。
郭中(くるわ)などへ入り込みて。療治(れうぢ)もおほかたよく行きて。

其の内勾當が方にひそみて年月を送りしに哀れ果敢なき身の上なり

郭花笠初編巻之上終